



海名

Shikoku

三

13
4786
3



門 13
1735
卷 3



第二卷

- ① 一 變八甲に細を元
- ② 二 委署久
- ③ 三 救う様
- ④ 四 房八百丈八
- ⑤ 五 軍刀を矢
- ⑥ 六 好よ茶志
- ⑦ 七 二階の月茶
- ⑧ 八 文珠七
- ⑨ 九 一
- ⑩ 十 寺の



① 一 癸六甲は似て元を鑑

賤六形よりせり巻をすく或は名いま
十二歳の時あをこれにけりまゝに信じて
を常事終り。家終末に白く海に
いづれにや。昔白馬をねく、十
列のたねをせり終りて、
五下と知んをねりて、
かきや。家終末に白く海に
梅担ハ二葉よりかきや。山椒ハ小粒

でも辛と感づき果して十二かゝる
りあけり。也。盗師と柳に恵と
て。賤をいへ。兄。盗師が片々
と。盗師。盗師の終り。まじり。終り。あ
と。盗師。柳下。恵の。盗師。老人の。あ
後。盗師。柳下。恵の。盗師。老人の。あ
か。盗師。柳下。恵の。盗師。老人の。あ



二 素子のうしろ

大敷せうりふざりせいのうしろのうしろ
 うへふとあやあづまい。又をうしろの百もた
 かゝるもの之うしろのうしろのうしろのうしろ
 守とて思ひ。是よりあやあづまい。又をうしろの百もた
 す虎とて思ひ。是よりあやあづまい。又をうしろの百もた
 けにあやあづまい。是よりあやあづまい。又をうしろの百もた
 と。後やあやあづまい。是よりあやあづまい。又をうしろの百もた
 虎とて思ひ。是よりあやあづまい。又をうしろの百もた

乃威が備り蛇は地獄にぬれりて
解きしは年にてけなりわが方の出来事
りんちやうすれは法馬はく。まをまに
見て志願がれ月々病の非心斤を
を屋とらう。事もお終。虎の子を
おとの信よ子おこりあはし揚
あまや税系とまらよおやと主乃
威を。そのらりと音くなおや。あはれ
杖を失くす。坊におまを。説

三三

あれくもどもあつらひを
よさらして標のそんらんから
今よ人のいふ書よい



③ 藪くす栲

藪くす栲は、すくすくしりすくすくしりすくすくしり
 と、林のすくすくしりすくすくしり
 伏勢ありしを、すくすくしりすくすくしり
 きて、すくすくしりすくすくしりすくすくしり
 けり、すくすくしりすくすくしりすくすくしり
 道、すくすくしりすくすくしりすくすくしり
 場、すくすくしりすくすくしりすくすくしり
 細くすくすくしりすくすくしりすくすくしり
 藪くすくしりすくすくしりすくすくしり



倒成り下りながらの馬をよりのまわして其の
 尻のふたを渡りおら。尻のふたを渡りおら
 穂ももはたきながら廣くを人源三人
 舟の海は幅三人舟の板橋ハ常れ橋を
 おゆせと向く若くは人源三人舟の板橋ハ
 源一人舟の板橋ハ常れ橋を
 橋をとりて舟のふたを渡りおら
 志を勝てふたの板橋ハ常れ橋を

④ 雁ハ八百矢ハ二千
 山を築きよしむるに去る者も担げいで
 速も及まずと打やむ時といはれども
 山を築すべしと云ふは又登るも月一
 一所を築も此をのりて後へ居るは細す
 然るも宿よりこれ後登るも月し云ふ
 坊主で末が後よりハゆりへ出るは
 雲海よりくくが中へ入るやと。此は
 まくおもひし雁ハ八百矢ハ二千先

此のまゝは秋のうらみであらうは的を
 射るは雁ハ八百矢ハ二千先
 車ハたの儀候はは出家の為す
 知れりは後を遊練するハ民士のむね
 育月たかしく大あり世にありは
 あつてハ志は細も杖と雲の如くは
 情却ておとすは仲のすまやか
 物智すも知れり大の儀ハ思ハ仲
 びがなり候



五 軍刀を以て矢を作

刺刀くさやれきぎおじと分別の志あをこへハるまの
 ねめ自あ経あ績くを合ふうてまの音を
 もなくんと六つと。志こをこしし思し案あんとてお
 うハくまらくらく見かん成せいあり治まるも
 ねく事ととすれあまさ病びやうなり力ありも
 通とて美作ちを加へよいはも正月の氣で不
 安ふ事り十五ハしとと花はん月見る道みち
 ぐらく大学せうはまれ世の多虎こ狼らうりとるを

忍一^{しのぶ}に^ま借^か残^{のこ}を^い軍^い力^ちを^て失^なを^ら死^に後^し
見^みて^て魂^{たま}を^りあ^らは^せは^らる^し。時^{とき}の^よ月^{つき}よ^は鼻^{はな}で
と^し殺^{ころ}して^や筋^{すぢ}と^も思^{おも}は^しと。お^おは^はが^が水^{みづ}を^りせ^す
ま^まま^まの^の徳^{とく}有^あり^て持^もつ^て膝^{ひざ}の^の居^いる^ら
ら^らひ^ひき^きと^と糸^{いと}を^りあ^らは^せの^のこ^こを^りあ^らは^せ。ぬ^ぬ
ぬ^ぬを^りあ^らは^せと^と収^とめ^めが^が力^{ちから}を^りあ^らは^せ
初^{はつ}三^{さん}年^{ねん}く^くす^すは^はき^きふ^ふと^とこ^こが^が風^{かぜ}が^が
や^やら^らる^るす



(六)

ぬよ赤帽子

浮世ハキトミ堂一寸先ハ周まわりくよ多おほん
 坊ぼうの徳とく堂どうをハケよあすハ海うみ船ふね
 色いろフ約やく帷ゐもア約やくとよハ外う道みちの表うら
 目めと鼻はなうあまや糸いとへのりやまぬ及および
 海うみがとよハ金かねハ髪かみをうして袖そでに糸いと
 と結むす手てわく琴こと以もて糸いとを教し習べ女に之の儀ぎ
 とよハ糸いと知し限かぎの商人あきんど氣いき也なりつて之のさ
 程ほどハさすのさくらよ。粗あら人ひとをさ其そのハ不ふ和わ
 三十九

人ひとハ糸いと海うみのたよとて糸いとを先まよ多おほん
 一ひとハ糸いとをハケよあすハ海うみ船ふね
 色いろフ約やく帷ゐもア約やくとよハ外う道みちの表うら
 目めと鼻はなうあまや糸いとへのりやまぬ及および
 海うみがとよハ金かねハ髪かみをうして袖そでに糸いと
 と結むす手てわく琴こと以もて糸いとを教し習べ女に之の儀ぎ
 とよハ糸いと知し限かぎの商人あきんど氣いき也なりつて之のさ
 程ほどハさすのさくらよ。粗あら人ひとをさ其そのハ不ふ和わ
 三十九



と云ふ。かきとて酒の片々まを。安んん
 身の損よりならぬ。おれよ。別せよ。みまや
 十年れ。言はれ。その名。細かぬ。傍れ
 うで。だて。すれ。我う。わく。あて。を。れ。か
 ぢ。あ。ら。ぬ。と。懸。だ。ら。う。い。ふ。を。よ。
 や。し。も。せ。ぬ。隣。の。み。を。捕。ハ。物。と。う。ら
 負。う。と。い。ふ。物。と。い。ふ。を。い。ふ。

⑦ 二階から月来さへ
観うらぬ橋を待たぐらぬ業は待たぬのハ
村路こそしせん徳をねよるや。百病が
度ちよなるは。歴あぐるも。福先徳をこ
乃る月なまも。今附はまきも。叶は
際ぎりや。約のぬ。給ふ事ごと。業ど
出。さるぬさう。穴市。二階より月来
さす。ぬか。影事。下り。ハ。毒のらん。毛を
ゆて。海を。り。め。弟。徳の。も。月。よ。あ。る

あらぬ徳は高より。知。ハ。本。糖。買。る。ハ
る。序。と。嵐。ハ。氣。と。聲。お。ら。る。知。か。お。徳。は。ハ
陰陽。ゆ。と。辻。月。お。は。あ。ぬ。が。よ。い。徳。が
ま。い。い。り。も。膝。靴。で。お。根。ハ。紙。ま
ま。い。ま。あ。り。と。ん。ぬ。え。紙。ま。げ。え。も
と。お。下。れ。け。と。と。下。り。ハ。空。の。物



三十二

八 文珠も筆の傍

後にもうさう落る事もたまは。塩屋の傍に
 杖をたてて。鼓打たし。楽屋みくらか
 武楽をうまよ。女場のよみ。中々
 よ。舞臺のや。せう。塩屋のよ。射。梅
 の。跳ても。う。かん。新。め。て。解
 きた。ける。お。す。い。あ。て。ハ。い。新。も。大。事
 よう。ける。あ。お。て。舞。と。ゆ。一。修。成。す
 地。を。舞。一。や



⑩ 寺かゝ里

寺かける川の中まで影まきりて全うなり
 見てもかみかきりてもその身は風で又
 福の林れま縁するら。あそつ暇めと寝る
 又計たてらぬ又。あうりく。あわゆる。糸
 ころ増えぬものどうし。あせふ。あせふ。あせふ。
 たりて。あせふ。あせふ。あせふ。あせふ。あせふ。
 何事ぞとされはけはのひざり。あせふ。あせふ。あせふ。
 又増えぬものどうし。あせふ。あせふ。あせふ。あせふ。あせふ。



一馬片々をどあるぬと。無鬼がらるるもあま
りがるよ其れめくや使し。いふくふをさ
そんぐらそよらわれちうく雲く。想
て後の糸。富貴たをいひまはく。まじり
我糸糸の糸糸一又えそくぬ者いゆ。海
んそ。返りももあね。あえね。と存
く。い。せ。也。合。也。り。海。富。も。ん。も。り。ぬ
坊。横。也。り。又。相。も。く。坊。の。幣。い。つ。を
い。と。と。腹。物。も。り。て。の。笑。う。く。と。

寫入侍きひの
神名

ありてに

寺より里へ

神岡の事

三十一

